

義男の自殺とお葉の駈落ちであつた。

それでお葉の自殺はネロイラズの分量が過ぎたのミ手當でが早かつたので正午頃までは意識が明瞭した、けれどもお葉の行方は皆解る術もなかつた。

村の人々の間にはこの二つの噂が時ならぬ花ミ咲いた「何んでも、お葉ちゃんも東京のい、男の處へ駈落ちしたんだらゆうこつただよ」

「佐兵衛さん家の義へえ可哀想にな」
「お葉ちゃんに乗られたんだもの、一層の事、死んで丁えれば宜かつたにや」

「本當さ、生きてちやあ他人に面を合せるが外聞が悪るかんべえ、お葉ちゃんに乗られた野郎だなんて見られるやうな気がしてさ」

「お葉ちゃんも、罪な娘だねえ」
「何！義男が野呂間なんだ」

「本當に今時の若い者は兎角間違ひが起り易くて固るよ」
「何んでも、今朝早く、自動車の音が聞えたが、あれで、東京の學生ミやらが迎へに来たんだんべ」

「さうく自動車が三十分へ止つてたやうだつた」
噂は、それからそれへ咲いていつた。刺戟の少ない村には屈の語らるる噂の王様なだから、義男やお葉たちの事件は確かに果の多分にある噂でもあつた。

だがお葉の家の者も、義男の家の者もその事については

はないおえふの夢を見ることもあつた。夢に見るおえふはいつも暗れやかに無邪気に微笑んでゐた。

或日、義男は變なスタンプの押された一通の封緘手紙を受取つた。

「御無沙汰いたしましたすみません。でも私は今日まで、手紙さへ書く自由を奪れて居たんです」

檢察の手が延びたとを同志から知らされた私は東京へ逃げのびて来た時、多くの警官に取り圍かれ到々、に來てしまひましたの、こゝは貴方たちの世界と別な世界です、丁度太陽と地球ぐるは離れてるやうにも思はれますわ、この頃、貴方もきつミ、私の氣持ちが解つてくたつたやうに思つて第一番に貴方に手紙を書くんです

私は正しい運動のためには、こんな位の事は覺悟の前で

ただ一口も聞かなかつたし、村の人々も氣の毒で黙つてるより外に道はなかつたのである。

一週間は村は、お葉と義男の話して、持ちきつて居たが「他人の噂も七十五日の俚語に違はず、一時的に巻き起つた龍巻きのやうに彼等のうはさも間もなく下火になつた頃だつた。

そこにまた一つのうはさが疾風した。
「お葉ちゃんを駈落したんぢやないんだつてさ……」

「さうかや、さうしたん」
「あ、まあ、監獄へ繫れたんださ」

「さうん」
「それがさ、おえふちゃんには社會主義者ミ交つて居たんで……」

「人は見かけに寄らねえもんだね」
「全くさ、女のさつべえに」

村の人達け嘲るやうに、げらげら笑つた。併し義男には笑へなかつた。

「確におえふの云ふ事が正しいのだ、あの晩の俺は夢中に乘てられる事ばかり考へて居たから悪るかつたんだ」
或時、義男はそんな事も追想して見た。おえふに對して男としての恥を感じずには居られなかつた。

亦、義男は薄暗い牢獄の中に蒼白くも處女の美しさを失

もあつたし、また小さな犠牲だミ想つて居ります。いまいくつ斯うした犠牲が重り積つてこそ私たちプロレタリアによりよい國は建設はされるのだミ確信いたして居ます。

これから次第にお察くなる事せう。今朝鐵窓から山茶花の咲いてるのを眺めて初冬だなご感じました。霜は毎朝のやうに降ります。し、渡鳥のさんざめきも絶えて、いつか鴉の不景氣な聲ばかりが寒空に聞えます。

もつミ長く心算で筆を執つたもの、やはり思ふやうに書けません。さうか、御元氣にお暮しくたさい。

「未來は青年のものです」その言葉を噛み砕いて考へて見てくださいね。
御免なさいね。

小林邦作「ある懺悔」は原本のページが欠落していたが、菊池（小林）邦作『隨筆 柿』の中に「あるさんげ」として載っている。それを再録した。

あるさんげ

「ははははなる程、抜目がありませんね」
私は斯う云いながら彼に「ペイ」した。彼はいい氣持になつて酒臭い息を吹つけながら矢鱈に饒舌り続けた。

「それは要領ですよ。何しろ、四十、五十の月給じゃあ、嬢やお供はおるか、自分の口でさえカツカツですからねえ。それや何時首になるか知れないし、後々のことや子供のことだつて少し位は考へておかなければなりませんからねえ。その位の要領をしておかないのは嘘ですよ」

「全く………さうですとも」
「わしが妾を持つて居たと云うのも矢つぱりその要領の一つなんです。妾なら嬢と異つて何を貰つたつ

て、別にサワリはないし、料理屋だから御客が出遣入りするのは、あたりまえでさあ。まあ言はば、わしが番をして××をやられたよなもんです。そりや、わしも随分良心にや攻められましたよ。さうして××連中のやることはだまて見て居て下々の連中は、こつびどくやつけたんですからねえ。世間への手柄に。氣の毒だとは思ふけれど背に腹はかえされませんからねえ。まあ世間中の犠牲と思つてあきらめて貰うんです。考へりや随分因果な下等の商賈でさあ」

彼はさすかに氣まじり悪そうな顔をした。それは云い難いことを無理に云つた時の表情であつた。瞬間私は彼をその氣まじり悪さから救わねばならぬと思つて

「その因果を感じて、此度足を洗つたと云う訳なんです」
「まあ、さういつた訳なんです。未だ恐いですが

「どんなひどいことをやつたか知れませんが、誰だつて人間は皆あさましんですよ。わしなんざあ、人間が決して美しいものと思つて居ませんねえ。人間は良くもなるし悪くもなるんです。結局、環境に支配されるとでも云うんですかね。それは人間が皆生きたいからです。わしだつて今、斯して人の

「私に斯う云つて盛に彼の胸の奥に在つて時々彼の心を暗くするものに引出しをかけた。が彼はだまて居て仲々話し出しそうもない。

「さうですわねえ、やむを得ない事情では……然し」と云つたがまた、言い流してつた。彼はだまつて、グイッと杯を乾した。私はスカササ彼が杯を置かない中につきかけた。トックリの口からキ色い澄んだ液體がチロチロ流れ出た。彼はナミナミと注が

「然し生きるためとは云い乍ら……ああ矢張り生きるためなんですわねえ。生きるためには人間も随分ひどい、浅ましいことまでやり遂げるんですわねえ」
彼は馬鹿にセンチメンタルになつて来た。私は何か彼の過去に一つの暗いものあることを直視したので、彼の話を鎌をかけて見たくなつた。

「十年やりました。さうですわね、十年、随分アブない橋も渡りましたし、寝ざめの悪いこともありましてよ。今斯うして生きて居るのが不思議な位です。思

「然し、生きるためなら止むを得ないぢやありませんか。構はずグングンやることですよ」
私は此處で彼の話を一寸油をさした。

「さういへばそれきりですがね……然し……」
彼は斯う云つて何か思ひ出した様に急に話を止めた。アルコールにホテた彼の顔にサツと暗い影がさした。

然し、直ぐ忘れた様にもとの陽気に掃つて話をつづけた。

「私に斯う云つて盛に彼の胸の奥に在つて時々彼の心を暗くするものに引出しをかけた。が彼はだまて居て仲々話し出しそうもない。

「さうですわねえ、やむを得ない事情では……然し」と云つたがまた、言い流してつた。彼はだまつて、グイッと杯を乾した。私はスカササ彼が杯を置かない中につきかけた。トックリの口からキ色い澄んだ液體がチロチロ流れ出た。彼はナミナミと注が

「十年やりました。さうですわね、十年、随分アブない橋も渡りましたし、寝ざめの悪いこともありましてよ。今斯うして生きて居るのが不思議な位です。思

「然し、生きるためなら止むを得ないぢやありませんか。構はずグングンやることですよ」
私は此處で彼の話を一寸油をさした。

「さういへばそれきりですがね……然し……」
彼は斯う云つて何か思ひ出した様に急に話を止めた。アルコールにホテた彼の顔にサツと暗い影がさした。

然し、直ぐ忘れた様にもとの陽気に掃つて話をつづけた。

「然し生きるためとは云い乍ら……ああ矢張り生きるためなんですわねえ。生きるためには人間も随分ひどい、浅ましいことまでやり遂げるんですわねえ」
彼は馬鹿にセンチメンタルになつて来た。私は何か彼の過去に一つの暗いものあることを直視したので、彼の話を鎌をかけて見たくなつた。

「十年やりました。さうですわね、十年、随分アブない橋も渡りましたし、寝ざめの悪いこともありましてよ。今斯うして生きて居るのが不思議な位です。思

「然し、生きるためなら止むを得ないぢやありませんか。構はずグングンやることですよ」
私は此處で彼の話を一寸油をさした。

「さういへばそれきりですがね……然し……」
彼は斯う云つて何か思ひ出した様に急に話を止めた。アルコールにホテた彼の顔にサツと暗い影がさした。

れた。その液體から発散するアルコールの芳香に、中毒者でなければ持たない所のウス気味悪い表情を浮べ乍ら静かに杯を唇に運んだ。

『それでは懺悔のために何もかも皆云ってしましよ！然し、此処だけの話ですぜ』

アルコールの刺戟に元気づいた彼は遂に彼の最後のものを語り出した。

『斯うして貴方だけにでも話をするのは少しでもおの罪滅しになればよいからです』

彼は斯う前提して続けた。

『それは、わしがM署に在動中のことですが、問題の初めは極くつまらないことかなんぞ、——あんな小さいことで今では時々思いますがね——M町は御承知の日本でも有数の機業中心地です。而して毎週二回づつ所謂銘仙の市が立つて近在の機屋が自転車に沢山の銘仙をつけて来て、其処で売り捌くのです。その機やさんの自転車が失くなったのですよ』

『なるほど』

『タカが自転車一台ですからね。署の方でもあまり

泣いてわしに犯人を上げてくれと云うのです。わしはタヤシクって、タヤシクって地団駄を踏ましました。がそこで——たしかに上げて見せましようと思つた。がその前で言い切ったのです。さあ斯うなると、是が非でも犯人を上げなければ止まないと云うのが、あさましい殺人根性でしてねえ。淺基な責任論や體面論が一層吾々を盲目にしてうのですねえ。当時わしは嫌疑者として目星をつけて、注意を怠らなかつた一人の男があつたんです。その男には竊盜の前科がありましてねえ。それは彼が町の商業学校に在學して居る時、何んでも卒業前のことでしたねえ。友達

の自転車を売り飛ばしてナヂミの女と——女は芸妓でした——伊香保へ遊びに行ったのです。少しタチの悪い野郎ですねえ。所がある晩奴が××と云う料理屋で芸妓を五人牽けて、一人で騒いだのですよ。當時その男は機を少しやっていたのです。だからわしはテッキリ野郎だと思ひ込んで、一種の誇りを感じて乍ら男を検束して了つたんです。偉らい幸福がめぐって来たような気がしましてねえ、その翌朝の新

氣にも止めず、却つて、拘られた奴の不注意をナヂつてやつた位なんです。処がそれがだんだん大規模になつた一日に三台も五台もやられるようになったのです。それに困つたことは自転車だけでなく、機もやられるのです。勿論一緒にやられるんではないが、十疋、二十疋と云うのが一度になくなるんです。斯うなると署でも責任問題ですからねえ。署長以下血眼になって、犯人を厳探したのですが、如何してもつきとめることが出来ない、其処へ持つて来て如何です。運の悪い時はマが悪いと云ふが、また新しい事件が突発したので、全く泣つたらに蜂ちゅうなあんなことですねえ』

『そりやまた、何んです、犯人は同じなんですか』

私は思はずつり込まれて、彼に質した。

『手形の偽造なんですよ、犯人に就いては署でも色々議論がありました。私は同一犯人と睨んだのです、手形は只、署の捜査方針を混乱させる目的にやつたものと見たのです。さあ、署へは毎日、署員の無能と怠慢を攻める投書が舞込む。署長に辭職を勧告するものが出て来るに云う始末、署長は残念が

聞には三段抜きで「稀代の自転車泥棒捕まる」——昨夜××様で遊園中××刑事の手に依つて——流石は名刑事……とかなんとかデカデカに書かれわしに対する賞讃と人氣とは実にスバラしいものでした。勿論それは署へ出入の新聞記者へわし自身の口から伝えたのですが……わしは世間の出鼻を挫いてやつた気がしてホットとしましたよ。然しあまりほめられて居るのが、却つて変な気がしました。それでダンダン心が冷静になつて行くに従つてわしは後悔しました。少し発表が早すぎたなと思ひましてねえ。如何かあの男が真犯人であつてくれればよいがと神様に祈りました。

『だつて大體の証拠は上つたんでしょうがねえ』

『実はその証拠と云う奴が未だ手に這らなかつたのです。そこでですよ、吾々の苦しい所は……』

彼は少し涙い顔をしながら斯う云つて更らに続けた。

『只わしは、最後の事情から押ししてその男が一囚に真犯人であると思ひ込んでから、その晩は留置場へ放り込んでそのまま検べなかつたのです。』

勿論検束は一寸聞きたいことがあるから署へ来てくれと云つて引張つて来たんです』

『抵抗しませんでしたか』

私は素人らしい興味を感じて斯う聞かずには居られなかつた。

『勿論抵抗しました。抵抗したからこそわしは如何しても奴だと思つて了つたのです。然しその時はもう相當に飲んでましたから、別にそりあばれもしなかつたのです』

(以下一三三三字削除)

『然し私にはもうそんな事は問題でなくなりまして。もし男が真犯人でないとなれば、わしは不法監禁で男から告訴を受けるおそれがあるし、そうなる一と私一人の首だけで済まなくなるし、署長だつて私の望はだんだん彼を如何にして自白させようと云う風に變つて来ましてねえ。金の出所や弁明をきくのが何だか恐ろしい気がしてなりません。其処で私は直ぐ下に居るNと云う刑事に応援をさせました』

『男は何んとも云ひました、金の出所は』

『勿論白状はしません。此処に私は絶対絶命、首になるか彼を黒にするかという瀬戸際です。一週間程考え続けました。彼を自白させる方法に就いてねえ。此の間、検束は毎日蒸し返され自白さすべきあらゆる手段は尽されたのですが男は頑強に口を緘して語らないのです。わしはほんとうに困つてしまいました。十日過ぎました。尋常の手段では駄目だと思つたわしは、一策を案出して最後の手段をとりました。わしは男に手錠を締めたまま留置場から引づり出して庭へ立たせました。其処には一本の大きな桜の木が太い横枝を出して居ます。太い麻繩が運ばれました。水を盛った土瓶が運ばれました……わしは鬼になりました。……』

それから二十分程過つて男は自転車泥棒の真犯人としてグツタリと疲れた體を横たえて夢の様な世界を辿りました。私は男がドロドロとしたクス黒い××を口から流して、うめく様に

『確かに私であります』

と云つた時は卒倒せんばかりの驚きと恐怖と疲労を

覚えました。それから私は刑事と云う職業がいやになつて一日も早く懺悔の生活に入りたいと思つて心に願つて居たのです。

彼は一気に此処まで話をつづけて残りの杯を傾け

た。

私は心に名状し難い戦慄と憤りとを感じた。

『懺悔！いい懺悔だ！』

私は心にセラ笑つた。それは此の刑事を止めた男は今M町に豪華な邸宅を構え、彼が要領でシコタマ握つた金をもとに懺悔の生活、高利貸をやつて居る。

(昭和5年 上毛大衆一月号)

『確かに私であります』

と云つた時は卒倒せんばかりの驚きと恐怖と疲労を

覚えました。それから私は刑事と云う職業がいやになつて一日も早く懺悔の生活に入りたいと思つて心に願つて居たのです。

彼は一気に此処まで話をつづけて残りの杯を傾け

た。

私は心に名状し難い戦慄と憤りとを感じた。

『懺悔！いい懺悔だ！』

私は心にセラ笑つた。それは此の刑事を止めた男は今M町に豪華な邸宅を構え、彼が要領でシコタマ握つた金をもとに懺悔の生活、高利貸をやつて居る。

(昭和5年 上毛大衆一月号)

『確かに私であります』

と云つた時は卒倒せんばかりの驚きと恐怖と疲労を

題改衆大毛上
SENSEN

官戦

第一號
八月號

光澤

文藝運動の任務

内山 繁

此の論文は最初同志島田の態度を批判するため書かれたものである。然るに同志島田はその後本誌が發刊されぬ前自らその誤謬を精算し「官戦」の旗下に目の廻る様な活躍を續けて居る。従つて同志島田個人に對しては最早必要なきものである。然し乍ら此の論文の要求は決して島田個人の問題ではない、それは文藝に志を持つ多くの人々の陥り易い誤謬である。此處に同志島田に敬意を表し乍ら、しばらく此の論文の對照たる許しを乞ふ次第である(筆者)

同志島田登司を批判しつゝ

革命への勝利とその完成が、藝術運動(勿論プロ藝術運動を意味す)の助力なくしては完成し得ない。こゝは、ロシア革命史の既に我々に教示してゐる所である。が、こゝに注意せねばならぬこゝは、その爲にXX主義運動の擴大強化の役割としての藝術運動の重要性を過重評價してはならぬことである。藝術運動には藝術運動それ自身の特殊性に基く役割のあるこゝを明確に認識すべきである。

然るに藝術運動の役割を過重評價して、これを以つてXX主義運動の全般的な最大な役割であるかの如く誤認してゐる同志のあるこゝを、私は恐れるのだ。

所て、同志島田が今度上毛プロレタリア詩人同盟を組織したのこゝであるが、これを機會に同志島田の犯しつゝ、あるこの誤謬を批判し検討するこゝによつて、我々プロ詩人(以下プロ歌人も意味す)に課せられた當面の任務の實踐問題を研究してみたい。

島田は藝術運動を以つてXX主義運動の全般的な最大な役割であるかの如き見解は必ずしも有してはゐないが、彼は發表機關のないこゝを常に嘆き不満に思つてゐるが(その現れとして上毛プロ詩人同盟が組織され機關誌「血汗」が創刊されるのであらう)、これはプロ詩人である以上最も警戒しなければならぬ點であり、且つ極度に排撃されねばならぬ態度である。しかもこの發表態度にのみ捕はれてゐるこゝは、プロレタリアートとしての脱落をさへ意味するのだ。

そこで、發表機關の問題に觸れる前に、藝術運動の特殊性即ち藝術運動の果すべき役割の限界とその効果性に就いて、私は研究してみたい。

てはプロ藝術の機能は何であるか。それは意識階級の低い未組織労働者農民全無産大衆をアチプロする役割を有つ。即ちプロ詩人は、プロ詩、プロ短歌により、資本家地主の呪咀すべき搾取温情主義を、そして支配階級並びに國家權力の一切のXXを徹底的に暴露し、側面的にはそれにより全被壓迫大衆の苦悶、憤怒、怨恨等XX的あらゆる感情を思想を、意志を具體的に組織的に統一的に歌ひ上げるこゝによつて、全被壓迫大衆にXX精神を宣傳し傳播し煽動して、XX

主義運動の實踐闘争に動員する模範の役割を擔當するのだ。

が、實はこゝに稍もすればプロ詩人達の犯し易い誤謬があるのだ。それはこれを以つて、XX主義運動の現段階に於ける全般的な役割であらうかの如く誤認し、プロ藝術家なる故を以つてXX主義運動の實踐闘争から、意識的に無意識的に逃避しようとする同志が往々にしてゐるのだ。

こゝで、私が鋭く強調しようとするのは、意識階級の低い未組織労働者農民全無産大衆をアチプロするこゝは藝術運動の機能であるが、それ以上の役割を擔當するこゝは不可能だといふことだ。前に藝術運動にはそれ自身に基く特殊性——限界があるが私が言つたのはこの事である。

それ以上は何か。アチプロされた全被壓迫大衆をXX主義運動の組織下に動員し獲得強化するこゝによつて、實踐闘争に参加せしめるこゝである。これはアチプロされた全無産大衆が實セン闘争に参加するこゝが絶対的である爲に、この役割をさへプロ藝術家が果し得るかの如く思惟し、作品行為にのみ終結して實踐闘争を逃避しようとするのは、プロ藝術家の甚だしき曲解であり認識不足の至す所であるが、恐ろしい詭辯であり誤謬である。プロレタリアートの立場に立つ藝術家としてこれは絶対的に認識され得ぬのである。そののみが極度に排撃されべきである。故にプロ藝術家は彼自身が生産するプロ詩、プロ短歌を、農村に工場にあらゆる職場に持ち込むこゝによつて、労働者農民がつまり腕を組んで實セン闘争の戦線に飛び込み、身を以つて資本家地主のXX、國家權力の一切のXXの闘争を血み流すにすべきだ。プロ藝術家はプロ藝術運動の特殊性にのみ逃避するこゝなく、このこゝを敢然と闘争するこゝによつてのみプロ藝術家の役割を完全に達成し得るのである。作品行動にのみ終始するXX主義運動は、輝やけるXX闘士としての反動化を意味するこゝを強記すべきである。

こゝで、發表機關の問題に一應觸れておくが、我々プロ詩人は必ずしもや強いて、特定の發表機關を有つ必要のない(現下の客觀的情勢下に於ては之換言してもよい)こゝは既に理解されたと思ふ。プロ詩人は各自の作品を我々プロレタリアートの獨自の方法と形式(それに具體的に論及してゐる餘猶ほ今ないが)二例證すら、自ら印刷して労働者農民に直接持込むか、詩や歌の朗誦會を有つか、或は我々のあらゆるXX的會合を利用するか等々、全被壓迫大衆をXX主義運動の組織下に獲得強化する方法を選定すべきである。

こゝで、島田を批判すると言つた重點に歸へつて、島田が「血汗」を創刊する意味が、現下の客觀的情勢下に於ける我々

々のXX主義運動に、如何なる役割と意義を有つかを検討してみよう。

私は遺憾なく島田等の「血汗」の創刊を以つて、我々のXX主義運動の擴大化を阻止するものとして、その價值を私は否定する。何故なら、現段階は詩雜誌などいふXX主義運動のオンの一部門に過ぎない特殊雜誌の創刊を認容する程、悠長な過程ではないのだ。それ以上に、XX主義運動の各分野を擔當する各部門の一大綜合的な雜誌を、絕對的に必要としてゐる重要な時期なのである。この意味に於いて「上毛大衆」が再組織され、「官戦」が新たな陣容の下に發刊されやうしてゐる直後に、島田がこの事を計畫したのには明らかに大なる失敗と言ふべきだ。

この雜誌創刊に對する島田が私には全然對立的な見解の相異があつた。私はナツプが實踐したその結成から再組織への發展過程を踏襲すべきであるこゝを主張した。即ち既に前述した如く「官戦」の旗の下に各専門分化の促進と擴大強化をあらゆる闘争を通じて戦ひ探つて、各部門の獨力活動の可能な域に於いて、藝術部門の機關誌を有つべきである。私は主張した。然るに島田は全然これを逆に、ルンペン的なまだ明確にXX意識を獲得し得ない、しかも我々の陣營に轉化すべき可能性ある人々を、一度詩雜誌の下に結集し組織した後「官戦」に合流させるこゝが彼の主張だつた。が、この彼の主張——戦術はプロレタリアートが著しく生長し、擴大強化されつゝ、ある且つXX的情勢の急迫しつゝ、ある現段階にあつては、既に揚棄されべき拙劣な戦術である。こんな舊くさい戦術で先鋭にXX化しつゝ、ある労働者農民を獲得するこゝは不可能なのだ。

又、島田等の雜誌創刊の計畫がXX主義運動の促進を阻止するものだといふ私に言つたが、無産政黨合同問題が既に判然り正しく我々に明示してゐるやうに「官戦」と同時に「血汗」が創刊されるこゝが、如何に我々のXX主義運動に不利な益であり我々の團結力を奪ひ、擴大強化しつゝ、ある組織層を破壊するかは、島田にしても既に熟知してゐる筈だ。随つて現段階は、眞のプロレタリアートの旗はXX黨だ、一つあるのみといふのが鐵則であるやうに、階級雜誌は(勿論縣下に於いて)たゞ「官戦」の存在をゆるぎなき強固に確立し「官戦」の旗の下に緊密に結集するこゝを、絕對的に最重要な任務とし我々が切實な關心事としてゐるこゝは、島田にしても既に實踐的に承知してゐる筈だ。しかも猶、彼が雜誌を創刊しようとするのは、所謂文學青年的な發表態度にのみあまりに捕はれてゐるからだ。島田が文學青年的なあまりに文學青年的な毒業——傾向を、敢然と清算し克服し得ないなら、遂に彼はXX的闘士から脱落するであらうこゝを、島田にいや彼を通じてこの誤謬を犯しつゝ、あるプロ詩人等にこの際警告しておく。

嘗つて我が國にプロ文學の發生した當初「作家たる前に、社會主義者たれ」を、プロ作家の前衛達は叫んだものである。そののみか昔、ブルジョア批評家さへも「文は人なり」を、言つたのではないか。故に、我々プロ詩人がプロレタリアの陣營にある以上、その先決問題は藝術家たる前に、鋼鐵のやうな階級の闘士たり得ないの自己を鍛へ上げるべきが、絶對的に必要條件なのである。眞の階級の闘士たり得ない者が、眞のプロ作家たり得ない論理を、我々は未だ嘗つて知らぬし、且つ理解できない。故に既に私が鋭く強調した如く、我々プロ詩人は眞に階級の闘士としての自覚と信念を把握し、その生活の基礎を労働者農民の間にがっちり根をおろして、××主義運動の實踐闘争に身を以つて参加すべきである。

以上、プロ詩人當面の任務に就いて不充分な考究してみたが、最後に更に最大な役割のあることを切實に強調して、この拙文の意を明らかにする。
それは當面の任務なきに、悠長な言葉で説明されべきものでなく、もつと決定的な絶對的な義務であり役割である。それは××への發展過程に於いて、我々プロ詩人は何時なりとペンを折り捨て、赤衛軍の一兵卒として我々の部署につき實踐闘争を闘争する覚悟と勇氣を保持することを、瞬時と言へば忘却してはならぬことである。作品行動以上の重要な任務が我々プロ詩人を實踐闘争への参加を常に促進してゐることを瞬時も忘却してはならぬ再三強調することに、よつて、この拙文を結論する。
結論するに際し、切角創刊されやうとする島田等の雑誌の存在價值を否定した私を諒承してくれるやう、且つ私の所論に就き島田のよき批判のきけることを熱望しをる旨附記す。以上

附記

私は、今度再組織された我々の「宣戦」が、我々のこの藝術運動を正當に理解し且つ重要視して、その眞の幾分かを提供してくれるなら幸甚と思ふ者であり、更に××主義運動の役割としての藝術運動を、血みごろな實踐闘争を通じて果敢に實行して行く者であることを、誓ふ者である。

昭和五年六月十五日

奴隷解放宣言

原島 清

青訓生募集のポスターを伊勢崎町にてみて「善良なる公民は青訓生から」チエツ！ そんな手段で俺達がだまされると思つてゐるのか。軍隊だけでは不安になつた彼奴等が青訓生をかりたてて死に物狂ひの武装をするといふのだ。そんな手段で俺達がだまされると思つてゐるのか。彼奴等の頭から教育してかかれ。人殺しの稽古ならきさま等に教はらなくてもきさま等を叩き×せるぞ。

血迷つた〇〇〇〇の狂亂の〇〇武装だ。ようし俺達は爆弾で×装して飛込むぞ。俺達兄弟を軍隊に引こぬかれるだけでも我慢がならぬえにその上青訓に引張られて黙つてゐるやうかよ。青訓も搾取手段の一つだぞ。

宣戦布告

島田 登司

俺達はモーターだつた。シヤフトだつた。ベルトだつた。ブルーイダつた。口の利けない機械だつた。口を利けば殺される機械だつた。ただ唸つてゐた。ただ哭いてゐた。質銀三云ふ鐵鎖に縛られてゐたのだ。

俺等の戦場へ行かうで

潮 番二

三・一五
四・一六
幾百の幾千の 兄貴達を
組んだ俺達の腕から
珠数つなきに引き千切つて行つた奴等
兄貴達は
既に色素の變色した筋肉に
處に喰ひ入る鞭を
暗がりの
豚箱で
牢獄で
牛の様に堪へ忍んで来た
奴等は確に凱歌を擧げて
ソーズよろこび祝宴に酔ひ痴れて居る
だが血塗られた一九二八、一九二九を
大衆の頭上に
ソーダ血吹いた血潮を
さう消し得たか
勝ち誇つた奴等の攻勢は
斷末魔的に
大津浪の如く
だが俺達は
俺達の腕で脚で
はだけた胸に
反抗し決意をキツシり盛つて
俺達の闘争を決死的に立て直そうて
一九三〇・三・一五
税金に苦しむ
滞納で明後日競買になる云ふ葉書を
親爺は無言でビリ／＼と割く
土を喰つても税金だけは納めろ云ふ
んだ人に云ふより先づ貴公が喰つて見
てくれ
税金を取らぬなら俺達の生活を保障しろ
そいてなげにや俺あ御免だ
毎月々々税金ばつかりやがつて空の
米糧をさうしてくるんだい
執達史がこのボロ葉書寄三火鉢に差押
の紙片を圓然にはつて
執達史の手の動きをニラマヘナル親
爺の眼に炎上る憤怒
土を腹につめても税金を納めろ云ふ
資本家共のからくりを發け

『上毛大衆』の奥付（昭和四年二月号）

（一、原稿ノ切、毎月十日迄。）
 昭和四年一月三十日印刷納本
 昭和四年二月五日發行
 群馬縣佐波郡茂呂村茂呂二〇四六
 發行編輯 菊池重作
 兼印刷人
 群馬縣佐波郡茂呂村今泉二九八
 印刷所 吉田印刷所
 群馬縣佐波郡茂呂村今泉二九八
 發行所 上毛大衆社
 振替 東京七九六〇五番
 電話 伊勢崎 七二八番

『宣戦』の奥付（昭和五年八月号）

（一、原稿ノ切、毎月十日迄。）
 昭和五年七月廿八日印刷納本
 昭和五年八月一日發行
 群馬縣佐波郡茂呂村大字今泉五三
 發行編輯 小林邦作
 兼印刷人
 群馬縣佐波郡茂呂村今泉
 印刷所 伊勢崎印刷局
 群馬縣佐波郡茂呂村今泉二九八
 發行所 宣戦社
 振替 東京七九〇五番
 電話 伊勢崎 三六番

『上毛大衆』同人一覽（順序不同）

| | |
|---------|-------|
| 尾池真弓 | 田村榮太郎 |
| 遠藤可滿 | 小林邦作 |
| 町田六合三 | 大野勇喜 |
| 澁澤廣吉 | 柳田幸太郎 |
| 小林文右衛門 | 岡田熱 |
| 菊池盛男 | 彌勒寺清 |
| 菊池重作 | 岩丸波太郎 |
| 宮川善三 | 川島健司 |
| 吉田庄藏 | 内川良雄 |
| 三好徳次 | 大澤要 |
| 光山玉次 | 杉田謙作 |
| 駒崎力三 | 藤田暁 |
| 村田一 | 山銅喜八郎 |
| マツドアップル | 大澤芝秋 |
| 内山留一郎 | |

◎同人募集、希望者は本社照會

（『上毛大衆』昭和四年二月号より）

全線

1

1031

近き女への第一信

俺は前を否定しない。
 前は龜井戸に生活してゐる。
 如何に多くの人々が頻登する事か
 前の肉群が梅毒患者の性慾にぼろ／＼にされ
 たつて、又前の頬がげっそりこけて髪がぞつくり
 ぬけたつて俺は前を否定しない。
 前は備主の無断の契約に反抗もせず、黙つて
 素直に賣られていつた。
 前は全生命をなげ捨て、備主と戦つてゐ
 るのだ。
 前は静だ、けれども強い。
 現在の道徳は前の真剣の氣持を律するに餘
 りにたぼけきつてゐる。
 金の無い故に金の餘つてゐる備主によつて賣ら
 れたのだ。その金が誰のふところを肥すのか、も
 う云ふ必要はない。
 前は泣き、悶え、狂つて泣、アイツ等に對し
 て爆弾となる事を誓つたのだ。

道徳は前を罰する事以外に何も知らない。
 前のひき締つた口唇は、アイツ等に、アイツ
 等の道徳に對しての鋭い武器だ。
 黙つてゐられるか、血を搾られ、肉をしゃぶら
 れ、そして金はアイツ等（備主）が搾るのだ。
 前に死の苦しみ以外に何が残つてゐるか。
 前はあの時、黙つて、素直に賣られてゐつた
 のだ。
 けれども前の魂の底には何が燃えていたか。
 真剣に、勇敢に、アイツ等をやつ／＼ける決意だ
 った。
 前は成程淫賣婦だよ。
 成程前は黙つて素直に賣られた女だよ。
 だが俺は前の剛健な闘いの決意を知つてゐる。
 俺は前を否定しないのだ。
 （S子に）

池田純一

金さん

山の上の畑に春の日は暮れる。
 菜の花時のかすかな憂愁が私の上にかぶさる。
 金さんは黙つて麥のさくを切つてゐる——
 金さんまだかな。
 ちつとだ。
 小作百姓の金さんは村の働きものだ。
 金さんの身上はガンジョウな真黒い肉体。
 金さんはかたかなとひらがなと漢字が少し讀める
 總領ツ子は金さんよりもよけいに漢字が讀めるや
 うになつたと喜ぶ金さん。
 仕方がないさ、又四人目が生れらあ。
 この頃の金さんの口ぐせを百姓のあきらめと聞い
 てはならない。
 ふんとい、百姓もこれまでのやうなわけには
 ゆかぬなあ！
 さういふ時の金さんの二つの眼はなぜあんなにす
 はるのか。
 うん、さうだ。
 私がうなづくとき金さんはにつこりと笑つて又鐵を

握るのだ——
 主人になりたい奴。
 主人を欲しがらぬ奴。
 ど奴も金さんにはかゝはりのないしろもの。
 自らの惨めな生活を知りきつた金さんの胸に、突
 き上げてくるねさしならない一つの憤怒、明日
 への確信は爪のあかほどの強権をもあてにはしな
 い。
 自ら起つものゝ意志。
 一人の金さん、二人の……めいめいの
 意志なのだ。
 暮れてゆく春の日。
 赤城は永劫に大きくゆつたりと立つてゐる。
 タもやをついて響いてくる金さんの鐵の音。
 かなしみの道化芝居をよどるな！
 それは重い足を曳きすすむやくざな私を打つ強い聲
 であつた。
 （S子）

石田小三郎

全線

第一輯

利根河原

一握のすなを示ししひとあらねど
けふも砂原にまろびて泪だぐみ
利根の川瀬に石の流るる音さけり

きのふ愚かにも身を投んと思ひて
そこ此處とさまよひてありしに
ほのかな想ひ出してもなけれど
アカシヤの花のいたく甘きゆえ
ひそかに心ろみだれて果たさず
流るる石音に哀しき悔ひを殘せり

ああ惜しみなきいのちなればとて
誰かこの身を棄よとするものぞ
けふも再び石投げて無事に歸らむ。

—(公園下にて)—

井田貞衛

吹雪を衝いて友は行く

その邊まで歩かふ——
俺達は人家を避けて田圃へ出た
三國の山は雪に見えない

冷い風は横なぐりに雪をたきつけて行く
ゴチゴチに凍つたあぜ路を
俺達は無言で燈のついた停車場へ向つた

親父の金をさらつて出たと云はれたくない
彼は着替へ一枚すら用意して来ない
訓練服の古手に

働かふといふ決意をしつかり包んで
すつぽう外套で監視をぬけ出たのだ
村の異端者よ!

母を想へば涙も出やう
明日のパン 今夜の宿を想へば淋しみも湧くであ
らふ。

然し俺は最早君をさし止めやうとは思はない

凡ては語りつくされてるんだ

×

行け!
君は君の新しい部署に
肉親も故郷もあらゆる桎梏をけとばして
今こそ本當に自由な君ぢやないか
たぢろぐな!

暴虐の吹雪はすさぶとも——
鐵の意志だ 肉弾だ

×

左様なら 元氣で——
俺達はガッチリ握り合つた
手にたまる雪を見て涙ぐんだ
暴れ狂ふ吹雪
吹雪を衝いて友は彈丸の様に走る

原登喜夫

斷片

どんな『かたり屋』も『すまし屋』の胸も筒抜けさせる眼
どんな姿をしてゐてもお前が好く生きてゐることは
我々をふるひ立たせる

お前のまた俺の

どんな少しの嘘も互ひに怒らしめ憎ましめたものは
あのドシヤ降りの底を踏み耐え
よろよろと惡漢の如く手と肩を組んで歩かせたものは
何んであつたか?

叩き潰せるものを叩き潰し切つて進む愛は
何を見つめてゐたからか?
俺はお前を信ずる

そして自分を信ずる

よし 俺達の道がどんなであらうとも
百も萬もの偽瞞の前に我々が脱線するなら
それは俺達が自殺したことよりも もつと取り返しをつかない罪惡だ。

萩原恭次郎

犬

チエツ—畜生奴

俺達の姿さへ見れば無暗に吠え立てる犬奴
何にが怪しく見へるのだ

ちいつ等の爲めには忠實らしく
俺達が少しでも俺達の聲でも立てれば

もうウサン臭そうな眼付きをしやあがつて
俺達の足元にウロッキまわり

かみつく様に吠えたりやあがる

俺達は當然行くべき道を進んで居るのに
犬は常につきまとい居るではねえか

チエツ—しやくな犬奴

あいつ等の前に出れば
ふれるだけこまかく尾をふつてあてんたらをして
けつかる

チエツ—あいつ等の爲めの犬奴!

誓ひ

少数と多数がもたらす矛盾を知らないか

少数の者の爲に多数が苦しみ

少数の支配が多数を××してゐるのだ

少数は食え肥つてゐるのに

あゝ多数は今日の糧にさへ窮して

生活にあへぎあへぎつかれてゐるのだ

少数のごうさんのせゝら笑ひが聞える

多数の叫ぶ悲鳴が氾濫する

あう仲間よ 多数よ

あまりにへだゝりの有る××××を

多数の力で××すること誓へ

——多数の意志の集結には

萩原憲

復讐の念あり

俺は競馬が好きだ
一路倒れる迄飛び抜くあの馬が好きだ
熱狂する騎手が好きだ
汗を握るあの観衆が好きだ
その日、俺には二十銭の入場料がなかつた
俺は勇ましい蹄の音を聞き
湧き立つ観衆の叫びを聞き乍ら、筋穴を見つけ歩
いた
胸はどどる
だが淋しさはどうする事も出来なかつた
番人に尻を叩かれて真赤になつた俺は頭をかき乍
らまた歩いた
そして！
足を折つて引き出され来る馬に會つた

あの優しい小さな目から涙が止め度なく流れ出て
ゐる
突き出された骨、垂れ下がる真赤の筋肉
幾條かの鮮血は泥にかたまり土に落ちる
あゝ！
静かに
然も、無言のまゝ、不自然に引かれて行く馬を見
るに、ぼろ／＼落ちる涙はどうする事も出来な
やつたなア！
その時から観衆に復讐のほのぼを感じ
騎手に復讐の念を抱いた。

温井藤衛

風止む

その夜は星が雲つてゐた
影のうすい星だつた
暗闇の中に枯枝が落ちた
空気が——涙の蒸發にむせて
春の幻想を破られた
地に落ちた枯枝は
胸病みて人世をちぎられた乙女の
弱い心臓だつた
冬は針の様な怖しい淋しさを持つ
天國の路は凍結してゐる
「轉ばないで行け」
「前に興へられた運命を抱いて……」
濕つた空気が何も言はない
人間は影だ
命は——哀愁の煙だつた
その夜は星が飛んだ

再び見られない星が飛んだ。
——従妹の魂に——
ぬかるみち
この路でなにをしろといふのだ
これ以上何を請求するのだ
昨日も 今日も
葉をまとはない枯木を見ろ
助けてやれ！
過去から救はれない人間を
餘り苦しめるものでない
こんなにくねるのは止せ
若しお前に洗禮したら
大變恥かしい目を見るから……。

小見杜詩夫

郊外への誘ひ

すてつきの唸りが響いてゆく
すてつきの響きが消えてゆく
萌え出でし路ばたの草をゆすりて
春めきし樹々の小枝をかすめて
三月のはれし青空へ
さやけきひびきがのぼつてゆく……
春だな
春は間近くやつてくるぞ
「とてもよい日ですなあ」
「さようもう春ですなあ」
打ち振るすてつきの先に陽が光る。

小澤義太郎

無言の思索家

ヒョロ長い煙突が伸びて居る
水つて固い土くれ
鶴嘴を握らなけりや食へない彼等。
寒風に横面をなぐられ
鶴嘴に全生命を托す
彼等の頭には哀れな妻子の姿が離れない
冷酷な時間とマムシの様な眼光にすすくめられて
日毎脂肉を消耗する彼等
哀れや花を探し玉を抱く心はあれど
パン得るための忍従と屈辱——
時代の不景氣——そして妻子あればこそ
終日、金と砂に追ひ込められて
はじめな彼等
疲勞を休める僅かな時間
汚れた腹がけの中より出した
すいかけのゴールデンバットに火をうつす
暢氣そうにつゝたつて居る煙突を眺める
細くすゝぼけては居るが
伸びた樂天家——無言の思索家——
何も彼もぐつとこらへて
ぼんやりと立つて居る姿は尊い。
あゝ煙突よ！
彼等は汝にむらうたれて生きて居るのだ。

大湊廣秋

★

労働の苦痛をばばえてからだ

太陽が俺から運げて行つたのは――

俺は今たえまなく磨たげられ

俺の希望は太陽に向つて突進する

すべて酬ひられる日迄世界の銃口の前に立ちほだかつて

俺は標的となる。

――一九三二・三・七――

川 崎 俊 吉

12

抒情詩稿

俺は暗闇の道を歩いて居た

冷たい雨は俺の神経を憂鬱にしてしまふ。

俺は空腹を感じ乍ら暗闇の道を歩いて居た

紙を打つた靴の音が俺の神経に鋭く響く。

俺は遠い仄かな電燈をたよりに懸命に歩き續けた、然しその光は餘りにも冷たい光を放つて居る。

俺は無性にその光に憧憬れた

然しその光は俺が近づけば近づく程遠ざかつた。

二十歳の俺はゲーテのファウストを讀んで居た、然し二十一歳の俺は資本論を愛して居る。

――一九三二・一・一――

狩 野 文 男

11

労働者と紳士

張りつめられた電線網を

蜘蛛のやうに四肢を巧に使つて

空中で働く電話線工夫の俺だ。

寒い雪風が皮膚を凍らせて通る

煤煙に汚れた電線が手足から顔まで

案山子のやうに化粧してくれる。

いくら寒くともこの手一つ離したら最期だ

よく道中に大の字なりに往生してゐる

蛙の有様が電光のやうに浮ぶ

スピード時代の街上へ墜死した俺は

きつとへたばつた蛙より無様な姿だらう。

公衆のためといへば体裁はいゝが、

この仕事も××××××金もうけの下積になるの

横 堀 伊 藤 太

14

無 題

硬い冷たいコンクリートの様な社会の中に

生活をさせられる。一人々々が。

一ミヤクの光明と希望とによつて。

一步々々と 明るい 温かい。

支配の中に支配のない家庭を求め。

終生共に友とし妻と共に握手して。

互に自由合意的人格をみとめ合ひ

友人。社会の人々に相互扶助的に生きてこそ

互の要求と要求の一致があり。

始めて相愛があり。そこに愛いて。

人類の悩み求める。真の愛。真の生活が生れ。

××××××の苦痛を逃れ押しつゝ。

人間としての生活が始められ

今迄で家庭を持って互に求め。求められぬ。

温かい意義ある生活の芽生はこゝにある。

タ ケ フ

またこの寒空に雪だ——。
俺達や一働かなくちや一糧をホ、バルことあ一出来ねえ。

しんかん降る雪のなかを踏む先のホコロビた靴の先が冷てえ。

かんねん、けん集金人——。

想つただけで面をへんに歪めた加入者の顔にフーツと胸が響からア——。

仲間よ。いまの俺の生活をま——さいてくれ。

所詮は食ふために生きて行かなけりや一ならねえ俺達だ。

xx.xx.xx.xx.

そんなことをひとつひとつ、フンガイして反逆すりやあ——。

誠が飛び。たつた獨りつきりゐねえ、ば——さんの泣言が聴かれねえ。

猫だ。

所詮は猫になつて働いてゐなけりやあ——ならねえ俺だから。

鷹 端 彦 録

朗らかに瘠せる

よく咀嚼すれば太るといふので
根氣よく噛んだ

麦飯が口の中でトロケきるまで噛んだ
噛めば噛む程

筋ばつた菜つ葉は齒齧にからみつひた。

三十日噛んでも

五十日噛んでみて

アバラとアバラとの隙がうまららないので
所詮麥飯と菜つ葉では

やつらのやうに肥えられないとあきらめをつけた
かへつて氣が清々した。

やつぱり雑に噛んで

ぐつと胃袋を開けつ放すに限る

荒くれ仕事になれた腹つべらしの俺たちだ
麥飯と菜つ葉で朗らかに瘠せて行け。

金庫

鑄跡にコロがつてゐる
空つばの大金庫。

あいつは

幾萬圓かのゲンナマと

幾萬圓かの手形と

幾萬圓かに相當する重要書類とを

猛火の中からくわへ出した奴等の忠實な番犬だ。

焦熱の責苦には口を割らつ

奴等の小手先には顯る柔順なあいつ。

滴々たる鑄跡の雨に

開けつ放されたあの大口が

さりもなく俺達を呑み込むのだ。

田 島 嘉 之

心 胸

今日も

戀人を夫ひしその如く
あてもなく冷路を彷徨ふ

大地は固く氷りて其の響は
失心せる腦裏にいたく突る

雙嬌たる巷に行けばジャズは苦しさ幻影をなげつ
け

無情なる風は

哀れにも冷やかにして青白き頬を打つ

髪はみだれて身も心も

狂人の如く亦夢遊病者の如し

夕べは西にかすかなる三ヶ月をまはして

ま、淋しくもまみゆる。

鶉 田 隆 幸

狂 暴

嵐……だ。

花、香葉、小梢は
血狂つた。

狭苦しい地面に

叫きつけられた。

強暴なこの鋼鐵のクサリで

名の知らない遠くへ

追ひ出された。

悪心なき小枝の全部の意志

明日の敗憐は誰の上に来るのだ。

狂暴な嵐……。

何時、何處へでも襲つて来るかい。

其の後から

後から……。

無數の春のいとなみか
咲き出さうとしてゐる。

抗 議

強權な雪が降り續いた。

街はドロドロした。

豚小屋の壁だ。

安泰なる肉も

不満なる靈も

一彩に塗りつぶさうとしてゐる。

埋め盡くされた。

凸凹ある大地の思惟……。

明日は誰の心に。

勝利が来るのか？

雪はなほ止まない。

幾萬の雪の刃傷を

私は、心から怒つた。

浦 野 哲

壁に頭をぶつけた
われめからた
ひとつひとつの権利がとび出したのは
それが小銃弾のやうに
ぼんぼんはねだすので
右往左往とにげ出した
にげ出した『嵐』は
忽ちはづんで
ころころころとかへつてきた
小銃弾に
権利のしきが削られてゐる
壁に頭をぶつけたわれめから
あゝ世の中は
結びのつかなくなつた『嵐』だ

向ふ側

此方側と向ふ側とは對座してゐる
此方側にばかり私がゐたら
私はこぶしを固めて行つたであらうに
向ふ側があるの
私は懐手してなだめてゐた
向ふ側がなかつたら
私は思ふ存分當つてゐたであらうに
此方側と向ふ側とはいつても對座してゐる

栗原道子

八百屋の書いた詩

『お早よう……』
今日は人蔘に大根
里芋に青菜ですがどうせう？』
『まあよかつたです』
白い赤城の雪
空の風が腹の底まで凍らせる。
……しかし俺が野菜を賣りに出なげりや
親や兄弟が鯉のやうにコチコチになるのだ
のしかゝる生活の重壓に
あじけた俺の意志はあもひろに立上る。
『お早よう……』
人蔘に大根里芋に青菜ですがどうせう？』
『里芋五錢もらうわ』

『ハイ 有難う……』

『お勝手へ廻してきくれ』
嘲笑・冷笑・ブベツの目
俺の周圍に起る朝の交響樂
俺は憤怒をギニューと嚙殺し
俺自身の意志に勇氣づける。
『今日は……』
八百屋ですが御用はありませんかね』
町の明るい勝手口に
俺は俺自身の悲壯な叫びをしみじみと聴く。

栗原重治

梅が蕾を持った

吹きつゝあらしの梅が蕾を持った
ぼつちりふくれて
霜凍る朝のつめたさに耐え
はげしい二月のからつ風に
つぼみは白く微笑つてゐる。
何ものも恐れず
何ものにもはゞからず
強暴な風の吹きまくる中に
潔く微笑つてゐる梅のしたはしい目
遠くの空で風がうなつてゐる！。

無題

主人に従順な番犬は愛される
尾をふり こびへつらふしぐさ
懶惰をかかす忠勤ぶり
臆病をかかす勇敢らしさ
主人のために己を卑み
主人のために己をなくする
従順な番犬は愛される
——可愛い、奴だ
残飯をやれ！。

黒井平太

子供の詩

子供が雪の軌道を作つて
そこですべつてゐる
ころばないで真すぐに
よろけしないでずんぐりと
樂しそうにする
それを見てゐると
あんまり面白そうだから
私もすべつて見たら
私はすべらないで
ひつくり返へつてしまつた。

子供の詩

でつかい でつかい 原中だ
小鳥がちりろく／＼啼いてるよ
一つ二つ三つ此の大雪の降る中を
おにごとなんかして
まあなんといふ元氣だらう
子供が二人木の葉の様に
雪の原中をとんで行く とんで行く。

ひるの月

ひろい ひろい 青空が
白い半月を一つもつたいなさうに
ながしてゐる ながしてゐる。
死
死んでしまえ それでいいではないか
あとはない……。

馬の詩

枯木と枯草の色あせた堀りつこで
馬よ何をそんなに一生懸命さがしてゐるんだ
どろをかき分けて 堀りやんだ馬は
じつとどろを見つめて泣いてゐるんか
ありまじ静かだ。

山村白鳥

病床の春

妹に贈られた壁掛に
三月の微風は囁いて
病みほうけた此の部屋にも
春が来た
白粉一つ つげなかつた妹に
今年の春は薄化粧をして
聞きわけのなさそうな堅い乳房が
若雞のやうに息づいてゐる
朗らかなステップを踏みながら
疥せ落ちた頬に
おねだりの口接を残したまゝ、
春の巷に吸はれてく 妹
張り切つた皮膚の匂と微な移香
前こそ 俺の春であり俺の花圃だ
俺はお前の春を心ゆくまで讚美しよう。

松 本 美 二 雄

百姓の言葉

霜が降つた 百姓達はおぼれた
不景氣に霜なんど降りやがつて
麥飯もろくく食われねえ
俺達はどうすればいいのだ
近眼で而もつんばな青平丹の
地主等にや何も解るめえけんど
のつびきなんねえ
俺達にや解り過ぎてこまるんだ
茶碗の音を聞く度に
集る七ツの頭をながめては
霜 小作料 地主 生計と
俺らあ考へずにや居られねえ。
——一九三〇・五・二——

老車夫の死

地球の輪轉と世紀の動脈に
文明は人を殺す

昨日も 今日も お、幾十年來伊那瀬な聲で
走りに走つた 此の路だ
だが文明の襲來 開化の新設に
客は日毎に減つて行く
呪ふべきは文明だ 機關だ いや社會だと
あく迄自動車に向ふを張つた
而し重實な文明の利器には完全に征服されて
一生涯の進路を 途方もない生活難に
終末のつかぬ喉を鳴らして
宿命と因襲に憂悶をかみしめて
自棄にも 昨夜
あのけた、ましい警笛一聲と諸共に
霜枯れの原野の偉大な文明の利機に
身も魂も奪れて終つた
殘虐者老車夫なのだ。

劍 持 定 明

春 來 い

鳥打帽、アミダですれ違ふ男女にぶつきあたつて歩
いてゐるのは俺だよ
金が一錢もなけりやむじょうに喧嘩もしたくなる
んさ
自動車に轢れたくもなるんさ
雪解けの道はボロ靴には憂鬱なんだ
パン屋のウインドウ 靴屋のウインドウ
洋服屋の店頭 酒場の賑はひ
妙にあてつけやがるコイツ等——
ぶちこわすぞ——ガチャンと
せはしそくに歩くのはやめてくれい
俺はあさましくなつてゐるんだから
今日も俺は何處でどうしようもないんだ
エレベーターはデパートの屋上へだまつてキタナ
イ俺を無料で運んでくれた
俺が失業者だからつて乞食みたいであるからつて
此のゴミ溜のやうな下水のやうな亂雑な建物や

小 林 定 治

今 日 も

俺は今!
家賃を拂らはねばならない事を考へてゐる
そんな事は無駄だ
考へて拂らへるのなら考へる必要もあらうけれど、家中ひつかり廻しても紙くづばかりの家へ来て金を
拂へとは云ふ方が無理だ
云ふ方が無理だ 云ふ方が無理だ
然し
考へる事は家賃を拂らはねばならない事だ。
風 の 日
雲は中空を走つて飛散する
地上に立てる凡てのものは
地を踏みしめて
がつしりとして互ひに自分を守つてゐる。

古 屋 三 郎

霜をまき散らす朝風だ
頬を射すやうな痛い冬だ
冬は 貧しい財布のやうに無情さだ。

踏み崩れる霜柱
足の先から頭の頂まで凍える貧苦
貧苦と厳冬を噛むで
環境を押し切つて生きる人生の苦悶。

人生は虚無の一片にしかすぎないものなら
生存とは一体何の価値ぞ
しかし苦悶それみづからが人生の意義だと云ふな
ら

人生はあまりに苦惱の渦巻だ
『笑ふことのために闘ふ俺達だ』
『働いて生きて聞つてゐる』

『俺達の詩はそれ自体血のにぢむ生活をひつゝか
んでゐるのだ。』

朝・光・生活

— 彼の詩は『題のない詩』と云ふのが本當なです —

友は疲れてぐつたりと寝て居たが
僕は眼がさめるとすぐに起きた

二階から下りた下の部屋で新聞を読んで居ると
新聞の黒いんぐが——大きな活字や小さな活字
がまるでとらんしつとから眺めた風景の様に僕
の眼の前ではねあがりねあがり躍り狂つた。

僕が新聞を読みきつて
窓の外の煙突から出る——絶えずもくもくと出て
来る乳色の煙りの行く末を見守つて居る時
はるかにラヂオの天気豫報を聞いた

朝のアナウンサーの聲を聞いた
旭は煙突をついで——煙突の煙りは煙突をほか
し、電柱の影が僕の見居る新聞紙の上へまで
のびる程旭が昇つても
友はまだ起きなかつた。

それら種々の友の言葉を想ふと
臍腑に喰ひ込む力強いものを感ずる。

ブラザー——頑強に生きる友よ
苦惱のルツボに起つてぐんぐん突つ切つて行く意
志で俺は生きてゐるぞ。

のしかつてくるものを踏み挫く意志
こみ上つてくる昂奮をぐつと押へる無表情な平然
ごうごうと耳朶を打ち胸壁を貫く怒濤の如き感情
いろいろの名によつてつぎつぎに支配が搾取が個
性を踏みじつて行く中に

頑張り 貫き 生きる飛躍と創造
そこにこそ 俺達の生命と意志の無限のよろこび
と詩が颯爽と甦生するのだ。

小林 絹 次

僕は
『疲れる事は良い事だらうか?』

と、頭の中で自問自答しながら
掃除しない部屋の中で一人ですはつて友の寝顔を
見て居た。
今日一日を如何にさぐるかとこの事に付て考へて
居た

亦今日も朝食は排す事にしやうか
と、きれぎれの記憶を纏め乍ら友の顔を見乍ら考
へて居た。

煙突の煙りが旭様をついで静かに昇つて居る
朝!!

天 野 純

友への書

黒曜石の様な君の瞳は
世界の大天文臺だ
宇宙の老衰期説を根本からひつくりかへしてゐる
宇宙が今尚ほどんく／＼擴がつて
焦化のプロセスであることを
微笑をもつて眺めてゐる。
友の誰れもが
妻をもち子をもち
髪はうすくなり小皺がよつて
生活に疲れてヨボ／＼してゐるのに
君はつや／＼として真黒な髪をふりかざして
少しの疲れもみせないで
大股にぐん／＼歩いてゐる。
君のどこをたゞいても
鋼鐵の音がする
まこと轟進中の装甲機關車だ。

東 七 人

思慕

はつ秋の空をさぶつて
洗濯するお母さんよ
そのしやばんだらけの手を
そつと わたしにうつさせてください。

そしてよごれた妹のよだれかけを
そつと そのまゝそこに置いてください。

秋の微笑みを
心にうつしをはるまで——。

青 山 恒

足下から戦へ!!

二月の凍りついた朝だ
河原の砂風が俺達の手足をしめつける
俺達はハンマアとスパナアを
動けなくなつた手で掴んで
鐵骨を撲ぐりつけてやるんだ。
河原の鐵橋工事は中途終つたが
コイツが出来上りやあ 又
俺達は失業渦中へ叩ッ込まれるんだ。
失業! 空腹!! 餓死!!!
俺達はプツ續けに打ちのめされて来た
俺達ルムメンも工場農村の兄弟も
金持の奴等にやあ非道を目にあつてるんだ。
兄弟達!! 立ち上らう!!
立ち上つて俺達から血と汗と命までも
搾り取る奴を××××××××やらう
俺達からはもう奴等から奪はれる物は
タツタ一つの鐵の鎖があるばかりだ。
朝鮮の支那のいや世界中の兄弟よ!!
俺達は兄弟達が到る所で

食も物と寝る所に苦しんでゐるかを
ちやんとよく知つてゐるんだ。
俺達が飯も食はずセンベイ布圍せえ
無くて困つてゐる時にだつても
金持の奴らは酒や女に酔ひしれて
りやあがるんだぞ!!
世界中の兄弟達よ!!
さあみんなが居る足下から立ち上れ
そして金持奴らと足上から戦へ!!
最初の闘ひに負けても閉口されるな
どんなに押さへられてもヘチキ返へしてやるんだ
俺達の勝利は眼の前に見へてるんだぞ。
オム風船は押さへればハレツするんだぞ。
俺達もいつまでも叩きのめされはしないぞ。
どんなに貧しくともどんなに苦しくとも
じつと我慢しろ!! じつと辛抱しろ!!
俺達の勝利は近づいてゐるんだぞ。
一九三二・二・二七
坂本 伸 一

都市へ

遙か屋並を越えて
からアの地域
まの直ぐに立つ煙突がある
高さぞ
二本
五本
七本
赤い煉瓦建は紡績工場だ
雪の残つた埋立地が見へる
ついで田ん甫が
原っぱの停車場が
鈍く光るミダナルが
曇天の下だ
からアのパンザイだ。

楠木厚太郎

吹つ越し

硝子戸をかすめて雪がとぶ
俺は教室の隅この火鉢から離れて窓に身を寄せ
俺の心がわかに動き出すのを感じる。
動きのない教場の空気が満喫して子供達は頭を振
り、身を捻ぢ向け、しやべる
あのガタ／＼折重つて陰る様名連峰
眼路のかぎり、地平線にコキ／＼盛り上つて雪光
る國境の山
學校をサホつたドラ息子が如何に愉快に一日をち
とめるかに慮心してゐるだらう
山狹の熊笹にアラ／＼と雪があつて冷たい風に
そよであるだらう
そいらはすつ飛ぶ雪片に塗り潰されて今日は見え
ない
俺は授業に倦んだ時、毎日それらに對峙して理想
し、決意し、仲間の風手を思ひ浮べて獨り熱く
なるのだ
今は山が見へない

『上州は毎日吹つ越しだ』と友への葉書の端に書
き添へやうか
現在、自分の爲すべきこと
仲間へ言つてやるべきこと
考へるほど多忙になる
自然、同僚との雑談の時はちやめられ無口になる
世の中をうまく泳いで甘い汁を吸ひ儲くなるだけ
ごまかしてのぼる
この考へに情した奴に何を説いたつて暖簾に腕押
した
無駄ごとは駄目よりない
信じられる仲間と地道に自分達の仕事を進めてい
くより何もなしだ
仲間同志の衝突も消毒になるが、他に仕事がい
くだけでもある
そいつを片付けていく中に泡の如くケシとぶ小感
情にこだわることを好まないのだ。
(群馬「杭」より) 一九三二・三月
南小路 薫

春を待つもの

水柱を傳つて夜陰の寒気が走る。
峻厳な真冬、襲する烈風の底に俺は忘却せられ
た一個の冷たい星である。
凍土帯にすつかり凍りついて俺は身動きならぬ
若しやに呻らてゐる。
いや呻らてゐるのではない闘つてゐるのだ!
銃先を敵に擬し彈條の如き意志を持つて
デリツ デリツ 押し進む
鋼鐵より固い同志の軍團の中に俺はゐる。
やがて解氷期のやつて来て
緑の朝を識えるまで俺達は待つてゐる。
眞實に春を待つ者は俺達だけなのだ。

斷片
胸から胸へ彈丸は既に裝填されてゐる。
やがて彈道を滑つて對者の胴體にナク裂する日
を待つばかりだ。
射手の腕に微塵の懸念もない。
鐵刃の如き意欲
俺達、もうどんな氷雨も恐れなくていいのだ。
百海操

村の女等へ

温泉情越とか言へ御身等はふだんに夢を喰ふ
 春宵麗月を眺めあかず涙すか
 人妻となりたるを見、あのれはあせるに足らず
 あへて御身等は芳香に浸るをさげすみ、泥をもつ
 てこれにあき代へたではないか
 御身等の臍舌は官能の戦慄を如何にせむかの告訴
 ではなかつたか
 最早御身等は生きる事に信がゆけぬと言はれない
 最早御身等は綺麗に十八歳を清算したではないか
 吹さらしの原つば
 起たうとするものをなぎ倒す原つば
 御身等はがんと起ち、御身等の部署に着く
 飯は黒い細粒でもたとと喰ひ目をめざし
 一絲亂れぬ歩武を持ち續けるのだ
 頑健な母體を形成り難くな世の中にいさぎよく生
 き抜けるのだ。

闇夜

水喧嘩

またく無気味な闇夜が巡つて来た
 めぐりの山峰がぐつと突立ち黙りこんで
 盆地の中に沈んだ黙々百姓家こいつもまた

翳す 松明ア めらめら炎えて
 闇の河原の 空まで いぶす
 (合鳴) ソレやれ 負けるな
 わあーつ わあーつ (以下略)

鳴るは 早鐘 飛ぶのは 磔
 歛に 唐鉄に 血の氣が 走る
 進め 繰り出せ 堰 打ち壊せ
 淺瀬渡れよ 水門 破れ
 水だ 水だぞ 喜べ 水だ
 涸れた田圃に 流れる 水だ
 稲が生さるぞ もつと もつと破れ
 誰れが寄せよと 一歩も退くな

—(自作改訂)—

晝の疲れが出たときみへあるか無しかにまつり構
 へてゐる
 村の真中で村のみやこだと言はれてる地點を始め
 三々五々星と相待ちまたいたいてゐる外燈
 時折りあんどんの小口を開けたやうに中戸からさ
 つと射す光り
 明日炊いて喰ふ米にさしつかへたと見へ白濁く音
 そいつがいやに胸へ喰ひ込んでくる
 一本杉の根元に寄りかゝつてゐる身に
 そいつがまた葉叫く音に變つてくる
 闇い電燈の下でなわなふ とつあんと 阿母と
 新嫁と！
 腕白盛りの餓鬼は無心に寝とるだらう
 豚も肩囊にもぐり込んで寝てるだらう
 鶏の中心はよいか 兎も
 二月の酷寒はぐんぐんこたへて来るだらう
 今日の日線もつゝがなく終り 明日の日線を控へ
 た合間
 こうした夜の戦線がこゝにある
 村人よ、明日のくる日の用意はよいか
 頑健に立つ日に立てよ村人よふんだんにたまつた
 鬱憤を存分にぶちまける日を知れ。

瀬木悦夫

娘のうたへる

仕方ねえだよ 諦めるだよ
 そんぢや 行くだが
 のう 父つつあんだよ

俺れが 身の代
 地主の面に
 厭と言ふ程 ぶつけて呉んろ
 辛い 別れに 水雨が降るだ
 泣くな 泣かずに
 のう 父つつあんだよ

俺れが 年明け
 待つてて呉んろ
 無事で 違者で 待つてて呉んろ。

小野吉郎

すてた新さが

今宵一人で
 裏田へ来たら
 渡る夜鳥に
 又泣かされた

泣かす夜鳥にや
 罪とがないが
 すてた新さが
 うらめしい。

地藏さん

清水薬師の
 地藏さん
 雪の降る夜は
 つめたからう
 俺さときん坊を
 そわせてくれりや
 つめたい思ひは
 させないほどに
 若い二人の
 御願だ
 そわせてくろろよ
 地藏さん。

川端惣吉

角兵衛獅子

—(森義八郎氏作曲)—

投げる 體は
 つめたい 臘
 新春の温さが
 どこにある。
 ええ どこにある。

ひがみ ひねくれ
 角兵衛獅子は
 眞の情に
 飢えてゐる。
 ええ 飢えてゐる。

八里 三ツ山
 吹雪の渦を
 越へてきました
 身も冷えた
 ええ 身も冷えた。

風は 逆風

空ア 薄曇り
 天道様まで
 情なしか
 ええ 情なしか

新春や 笑へと
 つづみの音も
 俺らにや鬼奴の
 鞭の音
 ええ 鞭の音

親の無い子は
 ひねくれ者よ
 浮世逆さに
 見て踊る
 ええ 見て踊る

竹本嵐子

(一) 故里の冬籠りの一情景 爐ばたを囲んで若き男女の
雑仕事、それは雪國の若人達にのみ許された享樂です。――

山の 風鳴り
雪吹く 夜さは
爐ばた ろの火に
櫓 くべろ

よなべ なわなの
爐ばたの 仕事
とても 噂に
花が咲く
うそだ まことだ

そだ そぢやないで

なわの なゐめの
ほづれも 知らぬ

爐ばた 爐の火は

とろ とろ 燃へる

頬の ほだ火も

とろ とろ 炎へる。

土屋 興志 緒

山の子は山へ
里の子は里へ
ちりちりばらり
學校が選けた
明日は日曜
明後日またね
さよならあばよ
蛙が鳴くよ。

子の子は山で
里の子は里で
明日の日曜
何して遊ぶ
明後日またね
また話さうよ
それまで内證
内證々々々々よ。

ほうほう 泉

ほうほう

鼻が山で鳴いてます

戸外は闇夜になつたでせう

ほうほう

鼻の鳴くこゑ 恐いでしょ

お藪の雀は寝たてでしょか

ほうほう

鼻はいつまで鳴くんでせう

寝ない子寝るまで鳴くんでせう。

ほうほう

鼻の鳴くこゑいやですね

早よ早よおねんねいたしませう。

青柳 花明

(一) 心かるく

遠山みわりや

越後境か

白雪ア ホイ

アレサ まだらに

はげて来た。

(二) 段々畑に

鼻歌まぢり

うしろ拜みで

麥踏みや ホイ

アレサ 陽炎が

煙に立つ。

(三) 空にや綿雲

千切れて浮いて

ピロリと

とんびが ホイ

アレサ くるく

輪に飛んだ。

砂をつかんで叩きツつける

風は空ツ風横なぐり

ヒューツト ヒュー

ヒュー ヒュラ ヒュート

破れ障子をサー

笛に吹く。

雪をふくんで吹く寒風は

赤城嵐だ 北風だ

ヒューツト ヒュー

ヒュー ヒュラ ヒュート

木枝 木枝にサー

吹えて鳴る。

澤田 亥之介

ユキノ フキ スサブ

ナツ マヒル ツ、ジノ モユル

アカギネ ノ カラツ風ノ

エイツ！ まつ紅な衆潮、黒流の思潮。

過去への訣別だ！！

あゝ、ガツチリと甦生した 俺の上州。

一九三二・二・七

青羽 春夫

もらひ泣き

もらひ泣き もらひ泣き
ともしびついで日がくれて
工場の汽笛は鳴つたけど

もらひ泣き もらひ泣き
ぼろは泣いたで泣きつかれ
この子は負ふて負ひつかれ

もらひ泣き もらひ泣き
泣いてねる子にすゝり泣く
この子の母さま未だ来ない。

こな雪

チンチチラチラこな雪ホイ
子供をつれた物乞ひの

亂れた髪にこな雪ホイ

チンチチラチラ日がくれる。

チンチチラチラこな雪ホイ

せなのも猿が丸くなる

お猿まはしにこな雪ホイ

チンチチラチラ日がくれる。

チンチチラチラこな雪ホイ

あの子は籠を背につけて

どこへ行くのかこな雪ホイ
チンチチラチラ日がくれる。

宮澤正二郎

早春

松崎伸雄君に献く

桑の芽の堅く閉ざせる砂山のその一隅に友の墓あり

倒れたる墓標の下ゆつくしん坊物言いたげに頭もたげり

いつの頃供えしものか壊れたる茶わんの中に残る飯粒

ホルセットはづせる足の細々と手術の痕のうづく頭かな

思ひ出は癒えげる足の瘡痕のうづきにも似て果なきものか

破れたるパンツの中からはみ出せし膝を揃えて飯を食ふ子等

いく個所のつぎこもやぶれ膝がしら丸々としてはみ出しけるも

信州諏訪湖に遊ぶ

湖をへだて遠つ岸邊にいく筋の煙たゞよふ諏訪の朝かも
湖を籠めし霧の晴間ゆほのぼのと諏訪の町見ゆ赤き煙突
朝霧の晴れてすがしき湖の遠つ岸邊に諏訪の町見ゆ

萩町三十八

嵐と渴望

云はく云へ涙の主は俺のみぞ自嘲と虚無と今日の日も暮る

俺のみが涙有つかとふと思ふ癡れし嘆に今日も泣くかな

正眼の構だじりく追つて行く鋭い批判だ嵐と渴望

戦はず春に背いて泣く奴となるらん俺をしつかり抱けど

良寛の嘶に魂の宙を翔び我に還れば風が吹く

あはれこの世に一個の苦惱者として萬人の苦を泣かんと思ふ

現實は魔術だ思想を蔽隠す不思議な假面だそれを剥取れ!

五年の苦惱は凡て一枚の白紙に還える虚無に泣くのだ(卒業證書)

正しいと信ずる俺の哲學は自慰に過ぎぬか孤獨をば泣く

憂愁は時に喰はれる春くれば自からして花も咲かうに(わが世の花も)

小智の苦惱の歴史を脱稿し反對物に轉化するのだ

啄木を評論しつゝ激して来て友を泣かした俺の悲哀だ

金がない——その一事で一切が證明される俺の悲哀だ

青い鳥追ふは虚無だと云はく云へ此の現實に泣いてゐらりよか

春の來る息吹ほのかな裸木に傷手うづきて冬天に泣く

(一九三二・二一九)

萩原信使

鹽原

向つ山の眞木の若芽は眼にしるし朝の廊下に立ちて見やれば

群らだてる眞木の木の間に二株の朴の木もまぢるわが向つ山

見てあれば群ら立つ眞木の木梢こむる霧はれゆきて秋空光る

谷川の上をたかくとぶ小蟲つらつら見れば蜻蛉なりけり

谷川に風わたるらしい面にとべる蜻蛉らみだるゝ見れば

隣り家の日はてりそめにし板びさし蜻蛉ら来りつらなりて並ぶ

たはむれに我がさしだせし手の上にとまらむとする蜻蛉のひとつ

山よかさこゝな道邊のむら草に女郎花などまじるさびしさ

豊田宗作

赤城登山

昭和五年五月八日赤城に登りて詠める

斷崖のま下にたぎつ白川の瀬の音さやけみ吾が聞きほりつ
白川の瀬に咲きあはる山吹の花賞でにつゝ憩ひけるかも
丹つぢの花をひたぶる欲りて吾が牧の荒棚をまたぎけるかも
瑞枝さす雑木の若葉もるゝ陽にはだら明るき熊笹生かな
眞壁なす崖巖が嶺の丹つぢの花たゝまつ渡瀬横切る
丹の色もあやに美しき巖が嶺のさくらつぢはたゝえあかぬかも
伏しのぞく姥子のぞろゆくゆれ落つ石かちあたる音のかそけさ
雑踏の知らぬ美し女と肩並めて赤城のやしろゝろがみにけり

瑞垣の久しき時ゆ吾を待ちて松の花粉に衣そめしとや
——途中待ちくれし文に——
——隣り住む妹へ丹つぢの押花に添へて——

猿なし荒棚越えて採りて來しこの押花は吾とし思へや

樹脂の香

門松を切ると見まはる小松原針葉のひかり目にいたきかも
枝切ればすなはちしるき松やにの匂ひにむせつ陽にたちひたる
香に立ちてやにの匂ひのたいよへるまひるひそけき小松原かも
鈍の刃に染みて香に立つ松やにのかそけさ吾が心なごめる

大友農夫壽

淺春の賦

今日の空の如くに心あうくと樂しまなくて堪え難きかな
樂しまぬ心を抱き吾が獨り泣きもしあ得ず黙し居にけり
レコードのリズムがホト／＼胸を打つ春雨の夜の愁ひ深きも
彼のひとが嫁くと云ひてホロ／＼と泣きしも淺春の雨の夜なりし
人妻てふかせにへだれいとせかうときひとかも春雨の夜に逢ふ
かつて吾れ春雨の夜に堪え難き想ひを抱きて街を歩きし
大きな罌りと知りつゝ吾が抱く戀心かも捨て難きかな
吾が前には常に暗き幕閉ぢし哀しみのありいみぢきと云ふか
たまさかに安き心の湧き來れば元朝のごとく嬉れしみにけり

——スキにゆく——

快くすべりたしとして思ひ切とステッキつげ直ぐに轉びぬ
吾が獨り轉びしに非らず友等みな轉びてあれば笑はれなくに
手も耳もはた又顔も吾がものと思へぬ寒氣襲ひ來れり
テントにて暖る嬉しき手袋の焦げしも知らずあたり居にけり
何處向いても轉倒式の制動法吾もはにかまず轉りにけり

大島義雄

夜

湯氣にあたつてよるめく老婆助めてくれえと悲鳴をあけてる
鹽に上りて風呂より抱出さんとあせつて母大汗だく／＼だ
ゐろりにかゝつた鍋から湯氣と一緒で鬼の煮える臭が立登る
障子を破つてさやつ／＼と喜んでる赤ん坊母がとめてる煤ぼけた障子
ゐろりのはたで酒臭を放ちつゝ杯を持つて悦に入る父
額のしはに波をうたせて徳利を傾ける父の前に赤ん坊が這寄つて行く
風呂釜の下に焚く火のまつ赤な焰湧き立つてくる釜が湯をこぼやいた
風呂釜に陶然として沈んでる爺ぢつと眼をつむる眠つてるやうだ
裸にて恥かしさうに股を押えつ風呂に入る隣娘の乳房が美しい
夕食後の板の間を雑巾をなすつ歩く女兒

河邊謙一郎

雜詠

——伊香保にて——

きり深き街ゆ落ち行く温泉の音の谷にひびきて夕近づきぬ
かへるではつかにもゆる温泉の宿の夕かたまけて春の雨降る
きり深き伊香保の町を立ちばなり縁が原に出にけるかも
終日を吹きすさびぬし風落ちて夕しづかに月出でにけり
夕づきて邊りものみな静まれり尺八の音のたゞにとほりて (彌田園董氏の尺八を聞き)
臥床のまくらへの壁の破れより吹き入る風の冷え／＼として (病床にて)
歌書くと展べて白紙に春風の光さやけく流れたるかも
眞向の赤城の山に雪降りて今朝吾が室はあかるかりけり
篠懸のかれ枯葉ころ／＼ころがれり石じき道のあけ方の風
うら庭の紅梅の花吹き出でて今日降りとはす雪細かなり

横堀竹華

薄明に描く

春浅み晴れしみそらのさやけきに雲雀の聲は澄みと降りたり
雪やみしこれのあしたや戸あくれば雪を散らして雀飛び立つ
竹藪にこもる雀の聲聞きつ春とのはぬ夕をさびしむ
春浅き山ふところの静けさや時をり落つる松かさの香
夕さればあしにつめたき黒土のさすがに春のしめりもちたり
朝まだき川べ露立つ春の水もやひの舟を二つ浮けたり
暮れてなほ野面に残る夕あかり山のみ寺ははや灯ともりつ
雨あがりま晝の雲のうかびゐてひかりたゆたふ春ざりにけり
あたまたやくし底に群れゐて水面吹く軽らの風にくつか泳ぐ
やうやくに暮れかゝりたる夕かけにかつにほひつゝ櫻花散る

田 島 武 夫

近 状

友の心吾れよりさかるこのごろよはやるゝ心をこらへて居るも
さかり行くころあわれぞつとむるもうからの吾にしたしまぬかな
云わまじなあのとけがたさいさかいのもも吾れのいゝしにあれば
友つひとは皆妻むかゆ吾れひとり取りのぞかれして春逝かむとす
いち早く春の聲あり日向れる土手の枯草芽ぶきぞ見ゆる
みぞれ雪二月の半のひと夜を降りこめて居む軒のしづきに
男であり女でありする友達も戀とや云われむ悲しさならい
—— M・M 様 ——
手紙に行爲に君のさがはあらわなり若き女のひたむきの心
取り交わす手紙の敷のしいなれば人達は如何に云ふらむ
ひとすぢの若き心に告げてやるつれなき言葉も限らぬまじ
裏切りそれのごとなる君の手紙かくも吾れの告げてもやりしが
世の思惑せしりも受けむ自ずからさめ來るまでをこらえて居なむ
幾度も告げてやりしをあやまちて思へる女はあわれなるかも
かくさずすべに物言ふかたくなの吾を君恨らむとするや
女あわれ性質をも知らぬかりそめの吾を頼りて物問ふて來り

田 中 孤 影

舊 作

恒な砂のうつし世人の中に居てわれ今何をして生きんや
ひとゝきは君が言葉に酔ひけりな逝く春の日も暫し忘れて
去り行きし思ひ出を戀ひ人を戀ひ己がいのちのいとしさに泣く
しみんと秋風を知る子となりぬ若きいのちもあつとろへしかな
ゆくりなく悲しき夢を見たりけり忘れ果てしと云ひし昔は
秋 立 つ 日
うつしなく夜のしづまに身を投げて聞く川の瀬とこぼろぎの聲
泣けよとや物思へとやほそくと窓に來て鳴くこぼろぎの聲
髪結へばくろかみの香に帯とけば帯のひびきにしのび入る秋
母の乳に似たる汁こそ流れ出づ桔梗の花を切ればかなしき
よき花と君とめでたる桔梗も思ひ出となりて三度夏ゆく
あつとづれの絶えてあらねば氣づかはるわがよき友の身の上の事
あつとづれの絶えてもうらみ言はぬほど我はも弱き子となりしかな

桑 島 雅 子

嫁 ぎ 行 く 人

我が戀は哀しかりけり片戀の逢ふべき日なく年を經にたる
語るべき日はもなくして嫁ぎ行く君戀ふ心消ぬべくもなし
今朝の雪君見たるなむ吾と泣く鶯とまをる枝の見えなく
君すでに嫁ぎ行くとし聞く宵に戀し心のませる悲しさ
あぼしまによりて語らふ宵月のあざけるごとく思へてわびしも
—— 友病みて ——
君たゝば天つ日のめも見ゆるらむ玻璃戸にてれる朗ら日の影
浅春の氣はみちぬれど君ふせる部屋にたゞよふ薬の匂ひ
安らけくいぬる心にためらへぬ君の吐息のはげしくもなれば
苦しげに洩らす言葉はかなしかり死のこのみのかよはば

布 施 義

古風な静けさ

— 私だつてどうかした拍子に骨がビシンと鳴るやうに
 — どうかした拍子に歌を一つ二つ作つてみたい氣持になるのです —

寂しさに極りませしみ聖を
 照せし月の静けさを思ふ。

昔より佛にしたがひてこもりたる
 數々の僧を思ひて寢ん。

小林秀子

早春

西空にはつきりと雪の赤城山をのこして山町の日暮だ
 何もかも寂しいことばかりだ青空にえがく空想のはかなさ
 春めいた空に大きな輪をえがきつゝ鷹が舞ふてる山町のまひる
 酒場の磨りへらされたレコードの音が春の夜の街路を流れる
 死を耽美していた頃のことを今靜かに考へてる春めいた夜

島田梅史

春季雜詠

風の中梅見のひとの戻りけり。
 たこ壺に藪咲きの梅を挿しにけり。
 綱代木に立つささゞ波や春寒し。
 春寒や濡れて色濃き龍の鬚。
 早春や桑苗を掘る風の中。
 松の葉に早春の雨きらめけり。
 春川やことりくくと大水車。
 春曉の月ほのとあり霧の中。
 語り居る耕人鍬に身をもたせ。
 春晝や猫寝くたれて干ふとん。
 畦塗りの鍬にてらつく西日かな。
 ふくよかな蓄の桃を剪りにけり。
 雲雀鳴くやうす夕焼の小松原。
 みさゝぎや松の中なる山櫻。

小川静波

後記

●全線第一輯を切つた時、我々はこゝに集る五十七名の血と肉の火花を見たのである。我々はそして固く熱い握手と共に更に明日を誓ひながらこゝに第一輯を送るのだ。

●我々はケチ臭い名聲とか、利害とか有名とか無名とかと云ふ範圍の下に集つてゐるのではない。我々は地べたの一人一人だ。我々は好き藝術をつくる事に精進する。我々の藝術は我々の生活から、全面的に發展して行く。

●第二輯以後には計畫は山積してゐる。この苦しみと喜びとを押し抜く事にのみ我々の力はある。明日へ！ 明日へ！

●我々は愚劣なる駄辨家に別れ、一切の必要の事のみ語つて行かふ。會員の手はたゞあたゝかく固く奥底ふかく握りながら、やさしき誤解な思ひをもつて。

編輯委員

- 古屋三郎
 - 大島義雄
 - 井田貞待
 - 横地正次郎
 - 狩野文太郎
 - 宮澤正二郎
 - 百海操
 - 松本英二雄
 - 川崎俊吉
 - 南小路薫
 - 田中春夫
 - 小林定治
 - 田島嘉之
 - 栗原道子
 - 土屋興志緒
 - 温井藤衛
 - 萩原憲
 - 天野純
 - 澤田亥之介
 - 瀧木悦夫
- (順不同)

全線は隔月發行

●會員組織
 (會員は發行毎に壹圓納入)
 ●全線は全會員の原稿によつて編輯する。

昭和六年三月二十五日印刷納本
 昭和六年四月一日發行

編輯人 前橋市神明町三〇
 發行所 古屋三郎
 印刷人 前橋市北曲輪町四〇
 印刷所 前橋市北曲輪町四〇
 上海印刷株式會社
 電話七九一番

發行所 全線社
 前橋市神明町五四(横地方)

原稿その他廣告一切の用件は
 全線社宛のこと
 定價 一部 金參拾錢

全線社
文藝講演會
 時日 四月十七日午後六時
 會場 高崎公會堂
 會費 無料
 主催 全線高崎支部